



FASHION PORTRAIT

PHOTOGRAPHY:
KURIGAMI KAZUMI

HAIR & MAKE-UP:
SATO TOMITA

PORTRAIT:
MUKAIYAMA TOMOKO

TEXT:
ARAI TOSHINORI

WE LOVE: **HERMES NOUVELLE VAGUE NOT HERE NOT NOW**





向井山朋子 いま・ここに

オランダに拠点を置き、ヨーロッパを中心に活動を続ける
 ピアニスト向井山朋子の展覧会が銀座のメゾンエルメスフォーラムで開かれた。
 二月五日の立春を皮切りに月末までの二十四日間、日ごと異なるメニュー、
 月の満ち欠けという自然のサイクルに抱かれる展覧会、
 演奏は毎日行われ前後の一時間を含めて数時間だけフォーラムはオープンされている

フォーラム入口近くの一角に、東北大震災で傷ついた二台のピアノが並ぶ。

猫脚の一本は壊れ、木材で補強された姿はまるで義足のようにあり、鍵盤は歪み、上部は曲線に沿って白い絹の布で覆われている。鳥の翼に似ているため、ドイツ語「Flügel（フリューゲル）」と呼ばれるピアノは、ここでは納棺のように置かれていた。向井山の『夜想曲』から繋がるモチーフだった。白い壁には not here not now ここでなく、いまでなく

と記されている。彼女の原風景に、柔らかな光が、四十五センチ角の何百枚ものガラスブロック越しに降り注いでいた。ここではなくどこか——ととにかく会場の先に進む。フォーラムのメインスペースには様々な想いを抱くように、アップライト・ピアノが吊るされたり、また重ねて置かれている。まるで空へと、螺旋を描くピアノは五線譜の音符のように美を奏で続けているようだ。

毎日一時間、時間を変え向井山朋子は演奏をした。時にバッハや時にシューマン、ある時はショパンの日もあった。居合わせた人々が音楽をどのように受け止めていったのか、またその空間をどのように知覚したのか、向井山は祝祭への旅を誘い、〈ここではなく〉と、問いかけていく。

人生を変えてしまうような一曲に果たして会えるのだろうか、小さな冒険だ。オープニングの五日に向井山が披露したのは、オランダの作曲家シミオン・テン・ホルトによる「カント・オスティナート」であった。演奏する前に彼女は演奏時間が五十四分であることを、観客たちに伝える。「カント・オスティナート」、カントは歌、オスティナートは繰り返されるということ。セクションの数は譜面で指示されるも自由だ。向井山の奏でる音を人々は自分の物語として写しとっていく。

向井山朋子、身体を駆使したインスタレーションを披露する彼女の〈いま〉を記録することを願った。写真家は操上和美、撮影は夕方の光を待って行われた。棺に横たわる彼女は眠るのではなく起き上がる様相を操上に見せていく。

「立春、新しく自分をこの時間と空間に置きたいと願ったのです」向井山朋子はこう言った。

「はじまりの物語。一番は場所を作りたいということ。エルメスの方からメゾンエルメスフォーラムでと、話をいただいた時に、自分と音楽を繋げる空間を思い描いていった。最初に『ここに住みたい』と思った。一カ月の期間観客とともに生きてみる。果たしてこの空間はどうなるのか、そしてわたしの時間はどうなるのか。日常と繋がっている、同時に非日常に誘う異化する力をここに置きたいと願ったのです。時間と空間、日常に断片を撃つような激しく交錯する場所、無数のガラスの箱から日が昇り、日が落ちる時を見つめる。この銀座という喧騒の街に瞬でも静寂があったもしいい」

場所に身を委ねることから、向井山は時空に潜む異化する想像の力を積極的に出来させることを願った。例えば瀬戸内国際芸術祭2013での向井山のインスタレーション『夜想曲』は、自然に寄り添うことで3・11の巨大な喪失から悲しみの曲を奏でていった。

「自然に寄り添うだけでなく、この人工の建物の中において、今回のモチーフは〈調和〉というものかもしれない。ここに来られる人々にも影響を受けていく。参加する意志、偶然に誘われた人、様々な位相によって歪み弾けることもある。例えば言うことをきかない子供がここを駆け回っていたらどうなるのか」

開放されたフォーラムでピアノ演奏をフリーで聴く。ある者は壁によりかかり、ある者が板の間に直に座って見る。コンサート会場ならこうはいかない。

「観客が持ってきてくれる予期しない雰囲気にはわたしはどうなっていくのか、それも面白いと思っている」

幾多のガラス窓による残響も祀憂であった。その演奏は驚くほど柔らかく響き、向井山のタッチの激しい展開も抱擁していく。「カント・オスティナート」、五十四分の中で繰り返されるコード、様々な死、向井山は自身の生きた軌跡を物語に変え、清冽とした美しいレクイエムを奏でていく。

生という渴望を捉え、再生の物語を謳う。例えばそれは〈いま・ここに〉在ることの大切さだった。向井山の奏でる音楽は不意にこのピアノの上に悠々と流れるようにあった。